聖霊降臨後第１５主日（特定１７）　各自が自分の心の確信に基づいて　２０２４．９．１．

イエス様の時代、ユダヤ教の指導者たちのグループには、三つありました。「サドカイ派」と「ファリサイ派」と「エッセネ派」の三つです。これらの内、「エッセネ派」の人々は、当時の神殿制度や聖書の律法について、主流のユダヤ教とは距離を置いて、荒野で修道院のような生活をしていました。この人たちは聖書には出てきません。そして、やがて消えて行きました。しかし、荒れ野で生活していた洗礼者ヨハネや、その流れを汲んでいると言われるイエス様の活動は、エッセネ派そのものだ、という見解もあって、注目すべきグループなのかもしれません。このエッセネ派については、簡単には結論が出せません。このグループについては、現在もいろいろ議論されています。

さて、その残りの二つのグループが、聖書に登場してきます。神殿の礼拝を中心にした、祭司やレビ人など、儀式を重んじるサドカイ派の人々と、町の会堂で律法を教える律法学者など、日常生活の掟に厳しいファリサイ派と呼ばれる人々です。

ところが、西暦７０年、つまりイエス様が十字架につけられてから４０年過ぎた時、エルサレムの神殿がローマ軍に滅ぼされました。そのために、祭司たちは働く場を失ってしまいます。そこで、ファリサイ派だけが残ったのです。そして、現在のユダヤ教までその信仰を伝えてきたのは、このファリサイ派の人々でした。

今日の福音書に登場してきたイエス様と論争した人々もファリサイ派です。
今日の福音書でイエス様が語られた、ファリサイ派の人々への批判の言葉は、「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」というものです。

ファリサイ派の人々がイエス様たちを問題にしたのは、イエス様の弟子たちの中に、食事をする前に、手を洗わない者がいたことです。このような掟は神殿で祭司が仕事をする前の規定です。ところが、ファリサイ派の人たちは日常生活でいろんなことに使った手を、宗教的に汚れていると考えていました。

今日の個所では、ファリサイ派の人たちは、市場から帰った時には、手だけではなく、体全体を清めてからでないと、食事をしないことが語られています。市場という所には、外国人の商人もいるので、特に汚れを受けやすい場所だと考えていたのです。

しかし、イエス様は、そんな手を洗ったり、身を清めたりする習慣は、神殿で祭司たちが仕事をする時に、その準備として行う事であって、それを日常生活に当てはめて、人を批判するのは、間違っている、と言われたのです。そして、それだけでなく、イエス様は、旧約聖書に書かれている、汚れた食べ物として挙げられている動物などについての理解も、その考えを否定しておられます。

「外から人の体に入るもので、人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。」と言われました。信仰は、外から見える形式よりも、その人の心の持ち方が大切だ、という進歩的な考えをイエス様は持っておられたのでしょう。

私たちが大切な教えだと思っているものも、新しい時代状況の中で、本質的なものと、そうでないものを見分ける努力は常に必要でしょう。そして、その努力をしないで、意味も考えずに、凝り固まったルールを守っている姿勢こそが、一番問題なのだと私は思います。

ユダヤ教の立場は、しばしば福音書ではイエス様に批判されているので、私たちは古臭い宗教と思ってしまいますが、現代のユダヤ教について調べて行くと、新しい時代に対応して教えをどのように実行して行くか、まじめに取り組んできていることがわかります。

現在までのユダヤ教は、今日の聖書に出てきたファリサイ派の伝統を受け継いでいるのですが、この人たちも、今では、３つぐらいのグループに分かれています。「正統派」「保守派」「改革派」という三つの立場です。正統派というのは、黒い服に黒い帽子をかぶって、もみあげを伸ばしている人々です。厳格に法律を守ります。しかし、保守派というのは、黒ではなく、普通の服を着ているのですが、男の人は頭に、キッパーと呼ばれる、丸い小さな帽子をかぶっています。その小さな帽子がついているので、「この人はユダヤ人なんだな。」とわかる姿です。でも、改革派は、そんな帽子もかぶっていません。

安息日。アメリカのユダヤ人が、「自動車と郊外生活とシナゴーグ（会堂のこと）」というテーマで、問題にしました。今から百年くらい前、アメリカで自動車が走り始めた頃のことです。「安息日に自動車を運転するのは、労働である。」という結論が出ました。だから車に乗って安息日にシナゴーグへ行くのは、罪を犯すことになったようです。

ところが、その後だいぶたって、町の郊外が開発されて家が建つようになりました。そこに家を購入したら、シナゴーグまで、遠いので歩いては行けない。こうなると、安息日には、シナゴーグへ行くのを諦めるか、あるいは自動車を運転するという罪を犯すか。どちらかを選ばなければならない。それで、「正統派」「保守派」「改革派」というそれぞれの立場によって、考え方や行動が変わってきます。

厳格な正統派は、どうするか。この人たちは、郊外には住まない。シナゴーグへ歩いて行くために、都会にとどまるのです。安息日に車を運転することの方が、シナゴーグへ行かないことより罪が重いと考えたのです。

それでは保守派はどうするか。この人たちは、複雑な気持ちを抱いたまま、会堂まで運転して行く。自動車を安息日に運転する罪を犯しても、シナゴーグの礼拝を尊重したい、と少し自責の念を抱きながらも、運転してゆくのです。

ところが、改革派と呼ばれる人たちは、安息日に車を運転するのは、決して罪ではない。それは逆に悦びであるばかりか、宗教的な義務でさえある、と確信している、というわけです。

ユダヤ教でもいろんな立場があるんだなあ、と驚くのですが、キリスト教にも似たような特色があります。パウロはローマの信徒に書いた手紙の中で、人々が断食したり、ものを食べたりする多様さを、それぞれ神様への感謝のためにしていることだから、それぞれを寛容に認めよう、と言っています。

◆兄弟を裁いてはならない
14:5 ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。 14:6 特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。

わたしたちが大切にしたいことは、みんなが同じ行動をとることではなく、それぞれ違ったやり方で、神様に感謝し、応えて行く生活をしているのを、理解して尊重する、ということです。そして、それはパウロが言う、「各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきだ。」ということになるでしょう。

今から１００年前の、パリオリンピックを舞台にした、「炎のランナー」という映画を観たことがあります。これには優秀な選手であるキリスト教の宣教師が登場します。オリンピックを目指して、何年も努力してきたのですが、１００メートル競走の予選が日曜日でした。権力者たちが彼に、「国への忠誠心には時々犠牲が必要な時がある。君も犠牲を払う時ではないか。」と言うのですが、彼はこの犠牲は払えない、と拒否します。クリスチャンにとっての安息日である日曜日は、神様の決められた掟なんだから、その掟を人間の都合でそれを押し曲げるわけにはいかない、だからスポーツをするわけにはいかない、と競争に参加しなかったのです。パウロが言う、「各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきこと」というものでしょう。

これは、安息日に車に乗ってシナゴーグへ行くかどうか、というユダヤ教の問題にも通じるものです。そこで、悩みながらもひとつの決断をしようとしている、その姿勢こそが大切なのだ、ということを改めて受け止めたいと思います。

私はこのところ、多くの人々が、自分自身で考えて決定する、ということをやめてしまっているのではないか、と思うことがあります。みんな、その場の空気を読んだり、忖度して、争いを避け、流れに任せてしまうのです。しかしそんなことでは、人間が人間性を失う危機になるのではないかと思います。私たちの日常生活で、いろんな決断をする時、神様との関係の中で、自分は今何を選ぶべきか、慣習に従うのではなく、自分の心の確信に基づいて、生きて行く、自覚した信仰が求められている、と思うのです。イエス様の今日の教えの核心部分は、そこにあるように私には感じました。